

路地の生活を描きだすこと

— ヘンリー・メイヒューの「方法」に学ぶ —



◇ヘンリー・メイヒュー著、ジョン・キャニング編（植松靖夫訳）、『ロンドン路地裏の生活誌 — ヴィクトリア時代（上）（下）』（原書房、1992年）

岩館 豊

社会的事象や人びとの営みをもつ「豊かさ」を、どのようにしてとらえ、表わし出すことができるのか。この問いを考える時、社会調査の領域を切り拓いた先達の営為から教わることは少なくない。そうした先達の1人が、19世紀半ば、大都市ロンドンの路地で生きる人びとの姿を描きだしていったヘンリー・メイヒュー Henry Mayhew (1812-87) である。メイヒューの大著 *London Labour and the London Poor* は1849年の新聞連載をもとにして、1861年から翌年にかけて出版が開始された。そのなかから「個人の姿が描き出されている部分」が抽出・編集されたジョン・キャニング編 *The Illustrated Mayhew's London* が、植松靖夫氏によって翻訳されたのが本稿で取り上げる『ロンドン路地裏の生活誌』（以下、本書）である。実際に本書では、「呼売商人」「娼婦」「行商人」「古着商」「大道芸人」「馬車の車掌」などといった人びとの姿が描きだされ、読む者を19世紀中葉のロンドンの路地へぐいぐいと引き込んでいく。では、メイヒューはどのような「方法」によって、路地の生活を描きだしていったのか。この問いを本書の記述から考えてみたい。

まず特徴的なのは、「街頭市場」や「劇場」といった都市の具体的な空間の描写である。メ

イヒューによって描かれた「喧噪と混乱に満ちた」市場では、野菜や魚などの食材、路上販売の飲食物、人びとの衣服や道端に並べられた古着、雑然と積まれた「がらくた」などが多様な色彩に満ち、人びとの売り声や物音が響き、香りや臭気がただよっている。

さらに際立っているのが、「呼売商人」「孤児の花売り娘」「羊の足を売る女性」「鳥の巣を売る街頭商人」「拾い屋をしている老女」「道化師」「盲目の老女」といった人びとの語りである。一例として「どぶさらいの男」の語りをみてみよう。

「おれはバーミンガムの生まれなんだが、物心のつかないうちに、ロンドンに引っ越したんだ。覚えてる一番古いことは、テムズ川のカルド・ポイントの河岸にいる時のことだな。干潮の時、おれは膝まで泥につかかっていて、だんだん深く沈んでいったんだけど、どぶさらいをしていた人が引っ張りあげてくれたんだ。…おれはカルド・ポイントでもう二〇年はこの仕事をやっている。耳まですっかり泥につかかってしまう危ない場所も知っているし、この床の上を歩くのと同じくらい、歩いても大丈夫なところも知っているよ。でも素人はやらないほうがいい。すぐに足を取ら

れて、沈んでしまうからな。ぬけ出すのはそう簡単じゃない。おれはあの人と長いあいだ一緒にいて、よくゼニを見つけたもんだよ、とくに排水溝に行った時にはな。とても面白かった。…泥の中に肩まで手を突っ込んで、シリング硬貨、半クラウン硬貨、たくさんの銅貨、そのほかいろんなものをつかみ上げるのさ。」(本書下巻 pp. 118-9)

こうした語りは、インタビューを相互行為という観点からとらえなおす論者たちによって再評価されている。取材が行なわれていた当時、「貧困層は自分自身の物語を話す能力がないと見なされていた」が、メイヒューは「この慣例となった見方を断ち切り、実際には貧困層が自分の生活についての的確に話すことができるということを発見したのである」(ホルスタイン&グブリアム 2004 : p. 62)。

さらに本書では割愛されているが、原著のなかでは分類表や統計表が多用されている。どの商品がどのくらい売れているのか、収入や支出はいくらか、生活・労働条件に関するデータが収集されている。臨場感のある描写や生き生きとした語りは、詳細なデータによって裏付けられているのである。

このようにしてメイヒューは、路地に生きる人びとの「生きざま」に迫ろうとした。その仕事は中産階級的な偏見や可視化の欲望と無縁ではなかったが、「街頭の民に焦点を絞りこむことによって彼はそこに凝縮された大都會の姿をも同時につかみとろうとしたのだ」(見市

1985 : p. 380)。メイヒューの「方法」とは、「五感を使い尽くした」現場での観察と描写、多数の情報提供者の索出とその聴き取り、数量データや統計表の活用など、さまざまな技法や素材を縦横無尽に組み合わせていくというものだったのである。

メイヒューは、路地という空間とそこで生きる人びとの営みを描きだしていった「先駆者」「開拓者」(野久尾 1977 : p. 93) の1人であった。自分の足でその場を歩き、耳をすまし、感じた事柄から出発し、あらゆる技法・素材・感覚を駆使して(なければ自分で生み出して)、路地の生活世界を豊かに描きだす、本書はこうした「先駆者」の生きた「方法」を伝えている。

参考文献

- 石川淳志・橋本和孝・濱谷正晴編、1994『社会調査—歴史と視点』、ミネルヴァ書房。
- ジェイムズ・ホルスタイン&ジェイバー・グブリアム、2004(山田富秋・兼子一・倉石一郎・矢原隆行訳)『アクティブ・インタビュー—相互行為としての社会調査』、せりか書房。
- 見市雅俊、1985「都市の生理学—ヘンリー・メイヒューの新しい読み方」、吉田光邦編『十九世紀日本の情報と社会変動』、京都大学人文科学研究所。
- 野久尾徳美、1977『社会調査論講義(1)—社会調査の理論と方法』、法律文化社。

(いわだて・ゆたか 一橋大学社会学研究科博士後期課程・日本学術振興会特別研究員 DC)